8月21日　「ニネベで宣べ伝えるヨナ」　聖書研究

テキスト　ヨナ書　3章

主なる神は悔い改めを喜ばれる。
罪人を赦してくださる神をほめたたえよう。

〈ヨナの服従〉

「救いは、主にこそある」(10) と信仰の告白をしたヨナ。そのヨナに再び主の命令が下ります。復活の主イエスが裏切ったペテロに、「わたしの羊を養いなさい」と言われた言葉が重なり合います。主が言われたことを直ちに行うという服従が大切であります。そして、同じような失敗（過ち）を繰り返さないことも大切です。

〈ニネベでの悔い改め〉

ニネベの町は、12万人以上 (4:11) と記されていることから、当時の大都会でありました。また、一巡するのに三日かかったと記されております (3)。ヨナが宣教するのは大変なことでありました。しかしヨナは、「あと40日すれば、ニネベの都は滅びる」と宣べ伝え、断食を呼びかけました。

40日という限定は、ノアの洪水時の降水期間 (創世記7:4)、モーセのシナイ山滞在期間（出エジプト24:18)、エリヤのホレブ巡礼（列王上19:8）などがあり、ある神が定めた一定の期間を示しております。そして、40日で滅びるというのは、ソドムとゴモラと重なっており（創世記19:21、アモス4:11)、巨大都市に対する悪のはびこりが強調されております。

その中でヨナは、滅亡の預言をし、断食を彼らに呼びかけるのであります。断食は、悔い改めを示す行為であり、神への立ち帰りの象徴でもあります。常識で考えるならば、こんなにひどい町がヨナの一言で悔い改めるだろうか、という思いが生じてくるかもしれません。しかし、不思議なことに、ニネベの人たちは、船乗りのように神を信じ、それを具体的に表し、ヨナが命令した通りに、粗布をまとい、断食をして悔い改めへと導かれていくのでありました。彼らは、不思議なしるしや奇跡を見て悔い改めたのではなく、ひとえにヨナが語った言葉において悔い改めたのでした。まず民衆が、ヨナの言葉を受け入れ、ついで王が彼の言葉を受け入れ、さらに王が布告をし、動物までも断食を命じられるのであります。動物までもということで、ニネベのすべてが神に悔い改めるという行動になっていることを示しております。さらにこのことが強調されているのが、「ひたすら神に祈願せよ（原語は「叫べ」)」(8) という言葉であります。単に祭儀的外面だけではなく、神に向かって助けを徹底的に求めるという姿勢と信仰が強調されております。

このような彼らの熱心な業に対して、主なる神はどのようにされたでしょうか。「神は彼らの業、彼らが悪の道を離れたことをご覧になり、思い直され、宣告した災いを下すのをやめられた」(10) と記されております。神は、断食をしたから、粗布をまとったからではなく、悪を離れ、神に向かったということで思い直され、やめたれたのです。

ここで大切なことは、神が思い直されて、やめられたということではなく、神が愛をもって彼らを赦されたことであり、異邦人の彼らを赦し、喜ばれたということで。私たちの信じる神は、悔い改める者を赦し、喜ばれる神であられるということを信じ、主をほめたたえましょう。(潮田　祐)

8月21日　「ニネベで宣べ伝えるヨナ」　説教展開例

テキスト　　ヨナ書　3章
参照カテキズム　子どもカテキズム　問67

〔単元のねらい〕

「主なる神は悔い改めを喜ばれる。罪人を赦してくださる神をほめたたえよう」。単元目標の教えと勧めにアーメンである。この箇所には面白い筋書きがあって、それに注目しながら物語りたい。逃避行を思い直したヨナが伝道すると、ニネベの人々は思い直して断食し、災いをくだすことを神も思い直される。むしろニネベの人々の罪を赦そうとお思いの神が、まず預言者ヨナを悔い改めに導き、更にニネベの人々をも悔い改めに導かれた。この神をほめたたえよう。

「悔い改めに導く神」

教会に誘いましょう。礼拝に連れて来ましょう。そんなふうに教会学校の先生から言われたとき、あなたは誰を誘いますか。仲の良い友だちでしょうか。誘いやすそうで、誘いにくいかもしれません。それとも、いつも独りぼっちの誰かでしょうか。誘いにくそうで、誘いやすいかもしれません。それでは、自分にとって一番嫌いな人はどうでしょう。絶対誘いたくない、連れて来たくないと思うかもしれません。今日は、そんな思いを抱いた人が登場します。

大海原で今にも溺れそうな人が、叫び声を上げています。「神さま、あなたはわたしを深い海に投げ込まれました。潮の流れがわたしを巻き込み、波また波がわたしの上を越えて行きます。わたしは、あなたの御前から追放されました。生きて再び国に帰ることも、礼拝することもないでしょう」。その声の主は、ヨナその人です。イエス様ご誕生から、はるか800年も昔に働いた預言者です。預言者とは、神さまの言葉をお預かりする者、という意味です。御言葉を聴き取ったら、それを告げ知らせる働き人です。

そんな大切な働きをする人が、なぜ溺れかかっているのでしょう。しかも、神さまご自身によって海に投げ込まれたのは、なぜでしょう。それは、このヨナという人が、神さまの言葉をお預かりしたまま、自分の心の中にしまい込んでいたからです。「さあ、大いなる都ニネベに行って、これに呼びかけよ。彼らの悪はわたしの前に届いている」。この御言葉を聴き取ったのに、ヨナは告げ知らせることを嫌がって、船にのって逃げ出したのです。逃げた理由は、イスラエルの神さまの言葉を、アッシリアという敵の国の人々に伝えるのが嫌だったからです。「イスラエルの神があなたがたに仰せになる。あなたがたの悪は、神の耳に届いている。あなたがたの罪は、神の目に明らかである」。そんなことを告げようものなら、きっと殺されてしまうに違いない。彼はそう思ったのです。

しかし、ヨナに御言葉をお預けになった神さまは、それを伝えさせずにおかない方でした。彼をつかまえて海に放り込み、彼が祈るのを待っておられました。命の危険のなかで、彼が助けを求めて祈ると、神さまは巨大な魚に命じてヨナを呑みこませ、三日三晩のあいだ魚の腹の中で、ヨナの思いを直そうとなさったのです。「わたしの主なる神さま。溺れ死にそうだったわたしを、あなたは引き上げてくださいました。わたしは感謝をささげて、あなたに従い直します。あなたこそが、わたしの救いだからです」。ヨナが思い直したこと、彼が悔い改めたことを神さまはお認めになりました。そして巨大な魚に命じて、彼を海岸に吐き出させたのです。こうしてヨナは、預言者としてもう一度、スタートラインに立たせていただいたのです。

「さあ、大いなる都ニネベに行って、わたしがお前に語る言葉を告げよ」。神さまのご命令を改めて聴き取って、預言者ヨナは、今度はすぐに従って旅立ちます。イスラエルの国から北へ300キロ、東へ600キロ、ユーフラテス川を渡り、チグリス川を越えて、アッシリアの国の都ニネベに着きます。一回りするのに三日もかかる大きな都に入った預言者ヨナは、神さまからお預かりした御言葉を叫びながら、一日中告げ知らせて歩くのです。「イスラエルの神が仰せである！ お前たちの悪は神の耳に届いている！ お前たちの罪は神の目に明らかである！ このあと40日もすればニネベの都は滅びる！」。今にも兵隊がやってきて、取り押さえられるかも知れない。すぐにも縛り上げられ、八つ裂きにされるかもしれない。そんな恐れを抱きながらも、思い直したヨナは、命がけで働きをやり抜きます。預言者を悔い改めに導いた神さまのご熱心が、彼をそうさせたのです。

するとどうでしょう！ ヨナが思ってもみなかったことが起こるのです。何と！ ニネベの人々が神さまを信じてしまうのです！ 敵の国の人々が、まるでヨナそっくりに、自分たちの悪い言葉や行動を思い直し、イスラエルの神さまの前で悔い改め、身分の高い人から低い人まで粗末な衣をまとい、断食するではありませんか！ 都の宮殿にいるアッシリアの王までが思い直し、その座から立ち上がって王衣を脱ぎ捨て、灰の中に座り込んで都中に断食を呼びかけるではありませんか！「人も家畜も、何一つ食べ物を口にしてはならない。食べることも飲むこともしてはならない。皆そろって、ひたすらイスラエルの神に祈れ。思い直し、おのおの悪を離れよ。悔い改めて、自分たちの手から罪を捨てよ。そうすれば、イスラエルの神も思い直してくださるかもしれない。アッシリアに対する激しい怒りを静めてくださるかもしれない。ニネベに住むわれわれを滅ぼすことを思い留まってくださるかもしれない」。

このあと起こったことは、ヨナをさらに驚かせました。ご命令に背いて逃げ出した預言者を赦してくださった神さまは、彼の働きを用いて御自分の民イスラエルを脅かすアッシリアの人々までも赦してしまわれたのです！ ニネベの人々が思い直して、罪を捨てて悪から離れたことを御覧になると、イスラエルの神さまも思い直されて、預言者ヨナを通して告げ知らせた災いを下すことを思い留まられたのです。

このように、イスラエルの神は、恵みと憐れみの神です。人間の罪と悪を、慈しみをもって忍耐なさり、彼らを悔い改めに導いて、災いをくだすことを思い直される神です。しかも、御自分が憐れもうと思う人を憐れみ、慈しもうと思う人を慈しむ神です。イスラエルの民だからといって、そのまま皆を赦すことはなさいません。アッシリアの者だからといって、そのまま皆を裁くこともなさいません。神の前に思い直し、罪を悔い改める人を、神は赦してくださって、災いを思い留まられるのです。ですから、イスラエルの神の御言葉は、預言者によって全世界に告げ知らされなければなりません。神の祝福と警告は、あらゆる人を悔い改めに導いて救いに与からせる、神の福音なのです。

預言者は、そのことを思い知らされました。ヨナは、受け入れがたいほどの神さまの憐れみと慈しみを、目の当たりにさせられたのです。それは、今ここにいる私たちも体験させられることです。神さまの御言葉を聴いていながら、それに背いてしまうような私たちを、神さまは悔い改めに導かれます。思い直して神さまに従い、福音を告げ知らせる私たちを用いて、神さまは世の人々を悔い改めに導かれます。神さまの祝福と警告の御言葉は、イエスさまの十字架と復活の出来事によって全世界に広げられ、人々を悔い改めに導いて、赦しと平安に与からせるのです。罪人を赦そうとなさる神は、私たちを悔い改めに導いて、この世で一番嫌いな人さえも悔い改めに導く神なのです。

（二宮　創）

〔今週の暗唱聖句〕　ローマの信徒への手紙9章15節

わたしは自分が憐れもうと思う者を憐れみ、
慈しもうと思う者を慈しむ。

8月21日　「ニネベで宣べ伝えるヨナ」　幼稚科

〈ねらい〉

神様は、ぼくたち私たちが心から悔い改めて、もう一回従っていくことを心から喜ばれます。その神様の愛について、御言葉に聞きましょう。

〈展開例〉

さて、ヨナさんは神様のお言いつけに背いて、ニネベに行くことをせず、タルシュシュ行きの船に乗って出かけました。しかし、神様は、失敗を通してもご自身の御心を行われていきます。大嵐の中に投げ出されたヨナさんを魚に呑みこませ、陸地に吐き出されました。そして、もう一回神様のためにお働きをするチャンスを与えられたのです。それは、あのニネベで、神様のために、神様の御言葉を語ることでした。

「主の言葉が再びヨナに臨んだ。さあ、大いなる都ニネベに行って、わたしがお前に語る言葉を告げよ。」(1－2)

ニネベは、12万人以上の人々が住む大きな町でした。(4:11) そしてヨナさんは、その人々に神様のメッセージを語ったのです。神の御言葉を語ったのです。

「ヨナは主の命令どおり、直ちにニネベに行った。ニネベは非常に大きな都で、一回りするのに三日かかった。ヨナはまず都に入り、一日分の距離を歩きながら叫び、そして言った。『あと四十日すれば、ニネベの都は滅びる。』」(3－4)

すると、どうでしょうか。ニネベは異邦人の街です。神様を信じない人々がたくさんいる町です。でも、そんな町ですけれども、「すると、ニネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけ、身分の高い者も低い者も身に粗布をまとった。」(5) 身分の高い人から、身分の低い人に至るまで、皆神様の御前に行いを改めて、そして、悔い改めて、神様を信じていこうとしました。

人々は思いました。「そうすれば神が思い直されて激しい怒りを静め、我々は滅びを免れるかもしれない。」(9)

それを見て、神様は、「神は彼らの業、彼らが悪の道を離れたことを御覧になり、思い直され、宣告した災いをくだすのをやめられた。」(10)

ニネベの人々が断食をしたからではないのです。粗布をまとったからではないのです。ニネベの人々が心から悔い改めて、行いを改めたのです。だから、神はニネベを滅ぼすことを思いなおされました。

神様は、自分の罪を認めて、自分が神様に背を向けていたということを認めて、心から悔い改める者を決して見捨てられることなく、心から愛して、心から赦して、そして心から受け入れてくださるのです。どんな人でも、神様の御前に心から悔い改めて従っていく者を、神様は愛してくださるのです。ぼくたち私たちも、神様の御前に心から悔い改めて、従っていきましょう！！

〈お祈り〉

天の父なる神様。あなたは、ぼくたち私たちの悔い改めを喜んでくださるお方です。心から悔い改めることができるように導いてください。主イエス・キリスト御名によってお祈りします。アーメン。

8月21日　「ニネベで宣べ伝えるヨナ」　小学科下級

〈ねらい〉

主なる神は悔い改めを喜ばれる。罪人を赦してくださる神をほめたたえよう。

〈展開例〉

わたしたちはお父さんやお母さんの言われることを素直に聞けなくなることがあります。また、兄弟（姉妹）や学校のお友だちと喧嘩をしてしまうこともあります。そして、喧嘩をした後、なかなか素直に謝ることができません。今日のお話は、神様から「大いなる都ニネベに行って、わたしがお前に語る言葉を告げよ」と言葉を預かったヨナさんのお話です。

ヨナが行った町ニネベは、とても大きな国のとても大きな町でした。町の人たちは違う神様を信じていたり、悪いことを行っていました。そのことを神様は大変悲しまれ、この町を滅ぼそうと決心をしておられました。

しかし、ヨナさんの話を聞いたニネベの人々は、王様をはじめ、たくさんの人がこれまでの自分を見つめなおして、悪いことはやめよう、神様の言葉に耳を傾けた生活をしよう、と心から思いなおしました。このことが悔い改めです。ニネベの人たちが「今までの自分たちは間違っていた」「神様、ごめんなさい」と心から思うのを神様はごらんになり、憐れまれて、ニネベを滅ぼすことをおやめになりました。

今日、覚えておきたいことは、私たちの思うがままに毎日を生きるのではなく、神様が何を私たちに願っておられるのかを考えて、神様の言葉に対してどんなにかけはなれた行いをしてきたのか、悔い改めることです。どんな小さなことでも神様にお祈りして、どんなに不安でも神様がそばで見守ってくれていることを忘れずに生きてゆきたい。神様がそばで見守ってくれていることを信じて、日曜学校に行きたいですね。

〈お祈り〉

神様。新しい一週間もあなたと一緒に過ごさせてください。まちがったことをしてしまったら、神様に「ごめんなさい」とお祈りができますように。うれしいときは「ありがとう」とおい祈りできるようにしてください。アーメン。

〈やってみよう〉

○聖書を開きましょう

横のキーワード

①船の中でヨナが引いたもの（ヨナ1:7）

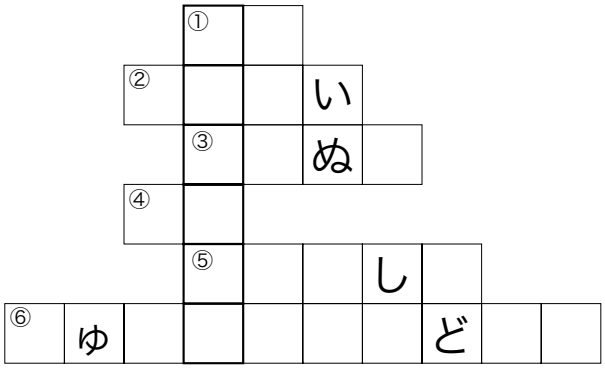
②日曜日に教会で必ずすること

③ニネベの人が断食のときに身にまとう布(ヨナ3:5)

④ヨナは魚のどこにいましたか？(ヨナ2:2)

⑤ヨナが主から逃れようとして向かった場所（ヨナ1:3)

⑥ニネベに行ったのはどうしてでしょうか？（ヨナ3:3)



太わくの言葉は？

【答え】くいあらため

8月21日　「ニネベで宣べ伝えるヨナ」　小学科上級

〈ねらい〉

ヨナを悔い改めへとみちびかれた神は、そのヨナによって更にニネベの人々を悔い改めへと導いてくださった。悔い改めを喜んでくださる神をほめたたえよう。

〈展開例〉

○神様の御言葉に従わず、神様から逃げ出したヨナでしたが、神様はヨナを見捨ててしまうことなく、大きな魚の腹の中で神様に祈りをささげる時を与えてくださいました。なぜ神様はヨナを海の中で溺れるままにほっておかれなかったのでしょうか。

→神様はヨナを深く愛してくださっていたので、神様に祈りをささげ悔い改める時を与えてくださった。神様はニネベの人々を救うためにヨナを用いようとご計画なさっていた。

○悔い改めたヨナに神様は何を求められましたか。

→もう一度「ニネベに行って、神様の言葉を宣べ伝えるように」求められた。(ヨナにニネベの人々を悔い改めへと導く役目を与えられた。)

○ヨナは神様の御言葉を聞いて、今度はすぐにニネベの町に行きました。最初に神様の御言葉に従わなかったヨナと何が変わったのでしょうか。

→ニネベに行きたくないという気持ちは同じ。(ニネベはイスラエルにとって敵国。ニネベの人々を助けたいという気持ちはヨナには最初も今度もなかった。)

ただ、罪深い自分を助けてくださった真の神様の御言葉に従いたかっただけ。

○ニネベの人々はヨナの言葉を聞いてどうしましたか。

→すぐにヨナの言葉を聞き入れ、神様を信じ、悪の道を離れ、神様に祈りをささげた

○なぜニネベの人々はすぐに悔い改めることができたのでしょうか。

→神様はヨナと同じようにニネベの人々も愛していてくださり、ニネベの人々が悔い改めるように導いてくださったから

○新約聖書の中でイエスさまがこのニネベの人々の悔い改めについて語っておられる個所があります。読んでみましょう。

→マタイによる福音書12章41節

〈祈り〉

神様。罪を犯す私たちを赦してくださり、何度でも神様に立ち返らせてくださることを感謝します。神様がどんなときも私たちを見ていてくださることを忘れず、神様に従っていくことができるようにしてください。

対話の手掛かりとして……。

①主の言葉が再びヨナに臨みました（1節）。
神さまはヨナにお命じになられた御言葉を、もう一度告げられます（ヨナ1:2）。神さまは、わたしの使命に再び生きるようにと、私たちを立ち上がらせてくださるのです。しかも神さまは、ヨナを別の道に召したのではありません。初めから決めておられた道へ招かれるのです。私たちの人生にも、多くの失敗があり、挫折があります。そこで立ち上がることのできないほどに、倒れ込んでしまうこともあるでしょう。この道は、もともと自分には向いていなかったのだと、別の道に行くこともあるかもしれません。けれども、もう一度、かつて自分が失敗した同じ道へと招かれることもあるのです。再び同じ道を歩み出した時に、「自分はこの道でちゃんとやっていけるのだろうか」「また失敗しないだろうか」という不安は尽きないかもしれません。しかし、それにも勝って、自分を再び立ち上がらせてくださった神さまの恵みにいつも感謝しながら歩むことができるのです。ニネベに向かったヨナの心の中には、「救いは、主にこそある」（ヨナ2:10）という喜びの歌がいつも響いていたに違いないと思います。

②さて、ニネベの人たちは、ヨナをとおして語られた御言葉を聞いて（4節）、神さまの前に悔い改めを表わします（5－9節）。神さまは、彼らの悔い改めを、ご覧になり、「思い直され」ました（10節）。神さまが一度お決めになられたことを、「思い直される」というのは、おかしなことだと思われるかもしれません（出エ32:14、アモス7:3）。人間ならまだしも、神さまがコロコロと心変わりしてしまうならば、いったい私たちは何を信じて生きたらよいのか分からなくなります。では、なぜ神さまは、ニネベの人たちを滅ぼすことを辞められたのでしょうか。それには、はっきりとした理由があります。神さまが思い直されるのは、人々が神さまの前から離れ、滅んでしまうことが御心ではないからです。だから、より多くの者たちを救う方向へと神さまの決定が変更されるのです。

③その中心にあるのは、神さまの「愛」です。神さまは聖なる方、義なる方でもあられますから、人間の罪や悪を放ったらかしにはしません。まぁ、これくらいだったら赦してやるかと、もう悪さをするなよというのは、優しさのように思えて、実に無責任な態度ではないでしょうか。もし本当の愛があるならば、その人が罪を犯さないように厳しく言い聞かせ、二度と御自分のもとから離れないように、ギュッーと抱きしめるのではないでしょうか。神さまが罪を犯した人間に対して、怒りを覚え、あなたがたを滅ぼすとまでおっしゃるのは、私たちに対する深い愛があるからです。あなたがたは滅んではいけない！　わたしのもとに帰ってこなければいけない！　滅びの宣告の裏には、神さまの強い招きがあるのです。このことを「福音」と呼びます。ニネベの人たちは、滅びの宣告の中に、強い神さまの愛の御声を聞き取ったに違いありません。

④罪人を滅ぼすことを思い直された神さまの愛は、やがてこの世に来てくださったキリストの中にはっきりと現れました。あなたは滅んではいけない！　わたしのもとに戻って来い！　という招きの声は、私たち一人ひとりにも向けられています。罪に苦しむ私たちは、ニネベの王のように、「思い直してくださるかもしれない」とわずかな望みを神さまに託しているかもしれません（3:9）。「かもしれない」というのは、「もしかしたら」ということです。でもキリストの十字架によって、「かもしれない」「もしかしたら」というわずかな望みは、100パーセント確かな希望に変えられたのです！